土田貞次郎日記

大正八年—
昭和十五年

晩年の上田貞次郎

Qb
A-291

同刊行会より寄贈
昭和38年9月16日

上田貞次郎日記　目次

大正八年（一九一九年）……三
大正九年（一九二〇年）……三〇
大正十年（一九二一年）……四二
大正十一年（一九二二年）……六〇
大正十二年（一九二三年）……六九
大正十三年（一九二四年）……八六
大正十四年（一九二五年）……九五
大正十五年（一九二六年）……一〇六
昭和二年（一九二七年）……一一四
昭和三年（一九二八年）……一二二
昭和四年（一九二九年）……一三二
昭和五年（一九三〇年）……一三八

昭和六年（一九三一年）……一四五
昭和七年（一九三二年）……一六三
昭和八年（一九三三年）……一八二
昭和九年（一九三四年）……二〇一
昭和十年（一九三五年）……二二二
昭和十一年（一九三六年）……二五〇
昭和十二年（一九三七年）……二七〇
昭和十三年（一九三八年）……二九八
昭和十四年（一九三九年）……三二〇
昭和十五年（一九四〇年）……三三四
夜雨荘日記……三四五
自　伝……三六七
附・上田貞次郎年譜……三八五
写　真
晩年の上田貞次郎（巻頭）
ジュネーヴ国際経済会議の際の記念撮影・銀婚式記念写真（本文の中）

上田貞次郎年譜

明治十二年(一才)

五月十二日　麻布飯倉町六の十四、紀州徳川侯邸内にて上田章の次男として出生。実は三月十九日の出生にして初め二郎と命名したが、和歌山へ出張中の父が帰京後、貞(さだ)二郎と命名の上遅れて届出たのである。所が戸籍はいつしか貞次郎となり、自らも貞(てい)次郎と称するに至つた。

父は通称を専太郎といひ、紀州家の家扶、至誠廉直の士で、母は良子(又はつな子)同藩の士族松尾三代太郎の妹で、利発だがおとなしい質であつた。

兄姉に兄敬太郎(明治六年生)と夭折した姉があつた。

明治十四年(三才)

八月　父病死、従つて父の俤は全然記憶がない。

明治十七年(六才)

公立飯倉小学校に入る。然し学校から帰へると徳川邸内の子供は皆漢学の素読を学ぶ習慣あり、森といふ老人の家へ通つた。又小学校の高等科になつた頃母に請ふて書道を永沼先生に習つたが、実はその先生が時々子供等を遠足につれて行くのが楽しいからでこの時代から散策に興味を持つた。幼少時は癇癖強く、徳川邸では「上田の癇癪玉」といはれてゐた。

小学校では概して優等生で、飛び級をしたこともあるが、時には怠けて叱られたこともある。

明治二十年(九才)

十一月　同居してゐた祖母(母の母)逝く。いいお祖母さんを亡つて嘆く。

明治二十四年(十三才)

三月　飯倉小学校高等科を卒へ直ちに芝公園の正則予備校(後の正則中学校)に入る。同校では当時東京大学の教授たりし外山正一、神田乃武、元良勇次郎が来て教へ、殊に元良先生の修身を熱心に聴講し、修養に心がけることが強くなつた。又猪間教諭から博物を習ひ進化論を聴いたのが一生涯に大なる影響を与へてゐる。

当時の学友では加藤成一(後に造船技師となる)高橋鐘四郎、河野広一などが親しかつた。

明治二十六年(十五才)

母が病床に臥すやうになつたのでその看護に疲れ、殊

に戸外運動は殆ど出来なくなつた。この頃趣味として碁、将棋、歌留多、テニス等何でも手を染めてゐたが後年まで上達したものは殆どなかつた。

明治二十八年(十七才)

フランクリンの自叙伝を読んでその十二則に倣つて「謹言、慎重、厳密、経済、摂生、勉強、大胆、寛大、決断、礼儀、高潔、仁愛」の十二箇条を「修身則」として日々反省すべきものとした。

尚この頃より既に自ら「貞城」と号してゐた。

明治二十九年(十八才)

三月二十一日未明　母に死別す。最大の衝撃。

九月　高等商業学校に入学。ミルの「経済学」を読み始む。

明治三十二年(二十一才)

級友の有志団体九鼎社(前田卯之助、村田省蔵、南郷三郎、園田謙三郎、渡辺与七、飯田一馬、大谷英一、高島菊次郎、石丸素一等)の一員で「二十世紀ノ継続者タリ改革者タル帝国青年ノ風気如何ヲ熟察スルニ吹ケバ飛ベントスル無気力輩ヲ以テ充溢セラル」「生等慨然奮起敢テ之ガ大改革ノ任ニ当ラントス」といふ宣言を発した。この盟は卒業後も親交を結んで渝らなかつた。

明治三十三年(二十二才)

七月　高等商業学校を卒へ同校専攻部に入学し貿易科を専攻す、高商在学中は人格の養成に専念し、学科に余り意を用ひず、従つて卒業の時の成績は余り優秀とはいへず、八十一人中二十番であつた。二十一番に出淵勝次、二十三番に松本真平、二十五番に村田省蔵、三十二番に高島菊次郎がゐた。

明治三十四年(二十三才)

二月四日　福沢諭吉逝く。直接薫陶を受けたことなきも、傾倒してゐた偉人の死に「心細き感」を催した。

専攻部に入りては学資に不足を告げたるにより東京倶楽部又は華族会館の会計など手伝ひ又この年十月からは国民英学会の商業夜学校で英語経済学を教授した。この頃商業世界に屢々寄稿、その関係で内池、佐野、水島等との交際が繁くなつた。

明治三十五年(二十四才)

六月四日　卒業論文「外国貿易論」を脱稿。この論文は指導教授福田徳三をして「考証該博而シテ紛糾セル学理を寸糸乱レズ明快流暢ニ論断シ去リテ殆ンド遺憾ナシ、著者ノ造詣ノ深キハ其学理的思索ノ鋭ト相俟テ此一篇ヲ成ス。独リ卒業論文中ノ白眉タルノミナラズ亦我邦幾百ノ経済論中稀ニ見ル所」と激賞せしめたのである。

六月　福田徳三教授より母校教職に就くことを勧められ学者たらんか実際家たらんか迷ふ。これより先正金銀行の中井芳楠氏より正金に入りロンドンへ赴くことをすすめられ、又三井物産へ入社をすすめる者もあり、又小泉新兵衛が自己の店を改革してくれと依頼するもあつて迷つたが、結局自らの力で立つ決心をなし母校に残ることとす。

七月　髪を分け始む。専攻部卒業。

九月　母校の講師を嘱託せられた。報酬一箇月三十円。

九月　駒込千駄木町五十島田方に下宿す、先輩福田徳三の家への往復が便利なる為である。

明治三十六年(二十五才)

一月　最初の著書「外国貿易原論」出づ。卒業論文を稍改訂し、福田徳三の校閲を経たものである。

三月　田崎慎治洋行に付教員養成所にて外国実践を受持つこととなり、且ヘーヤ氏より商業地理を譲らるることとなる。

四月二十七日　初めて講義に出席。

四月　切田太郎の紹介にて東亜商業学校にて商業地理を講ず、一週二時間。

九月　新学年より養成所にて経済学二時間、商業学二時間を担当。

十月四日　小石川小日向水道端一丁目三十七へ移る。ここは堀光亀等の借家なりしも彼の洋行のため、関根ようといふ婆さんをつけたまま引継げる由緒ある梁山泊。加藤成一、同弟、内田稔等と移り住む。

十二月下旬　三味線を森嶋伯母に習い始む。

明治三十七年(二十六才)

四月　商業学校同窓会常議員に選挙さる。(同窓会は後に如水会に事実上継承。)

四月　杉浦剛太郎経営の東洋商業専門学校にて一週三時間の講義を担当、一時間の講義料金二円、一ヶ月二四円。

八月二日　福田教授突如休職を命ぜられ、大なる衝動を受けた。これより独力で学問に志ざすこととす。

九月　養成所にて更に商業史を担当す。

明治三十八年(二十七才)

一月　商業史教科書日本之部、外国之部同時に出版さる。これまでの著書は貞二郎と署名せしも四十二年本書の改訂版以後は貞次郎とす。

四月二十五日　任東京高等商業学校教授

九月二十日付を以て商事経営学研究の為め満三年間英、独へ留学を命ぜられた。

十月十四日　午前六時四十五分新橋発、十時横浜発洋

行の途に上る。
十二月十二日　ロンドン着。
明治四十年(二十九才)
七月　ドイツへ渡る。
明治四十一年(三十才)
八月　再度英国に渡り、十月パリを訪問。又英国へ帰り、十月三十日にはニューヨークに到着。
明治四十二年(三十一才)
一月十三日　アメリカより横浜に帰る。帰朝後一時飯倉の兄の家に寄寓してゐたが、二月麻布仲之町に家を借り、旧の水道端の家の古道具と関根ようといふ婆さん共々移る。
四月十四日　向笠岩之丞長女てい(明治十五年生)と結婚、但し披露は辛酉事件のため遅れて、五月二十八日。
秋の新学期より本三の商工経営、商業史、本二の貨幣論、専攻部の演習を担当。
十一月　小石川区小日向台町六の二へ移る。
明治四十三年(三十二才)
二月十四日　長男正一生る。
九月　更に養成所にて経済原論をも講ずることとなつた。
明治四十四年(三十三才)
一月　和歌山県学生会が解散して南葵育英会創立され、創立委員の一人として徳川侯爵の相談を受く。
三月　鎌田栄吉より徳川侯令嗣頼貞侯の学業のことにつき相談を受けた。
九月　小日向台町一の三五へ転居。
十月一日　次男良二生る。
九月より翌年一月にかけ専攻部問題に奔走。
十二月　社会政策学会委員となる。
明治四十五年(三十四才)
一月二十二日　三浦新七教授足かけ十年の留学より帰朝、新橋に迎ふ。
一月二十四日　専攻部存続と決定。三月二十五日文部省令を発し専攻部を永続せしむることとなり、多年の問題はここに一応解決した。
四月八日　伯父松尾三代太郎六十六才を以て逝く。異色ある人物であつたが不遇のため甥の所に同居してゐたのである。
大正元年(三十四才)
九月　先年刊行せし商業史教科書を改訂。
十月二十一日　一橋会編纂部の総会において部長に推され、爾後長く部長として尽力した。方針は煽動もせず、干渉もせず、ただ言論をなるべく自由にするにあ

つた。
十一月二十六日　徳川頼貞侯の教育のために麻布新網町一の十五に移転。
大正二年(三十五才)
七月十八日　三男信三生る。
九月三日　徳川頼貞侯と共に英国へ再度留学のため出発。
十一月十二日　冨山房よりかねて印刷中の「株式会社経済論」を出版。再度の洋行までの研究をまとめた労作。
大正三年(三十六才)
七月　関一教授大阪市助役となり学校を去る。
八月　坪野校長退き、佐野善作校長となる。
九月二十三日　学校より急遽帰朝の電命に接し、戦火の欧洲を後に梅田某、和田久一(曽我廼家五郎)と共に十一月十四日ロンドン出発、同十九日ストックホルム、同二十六日ペテログラードに着、シベリヤを経て十二月十一日満洲里、同十七日京城に着き、同二十四日新築の東京駅に着いた。これより前、家は再び小石川小日向台町三丁目へ移転してゐた。帰朝後は商工経営及商業政策を講義し、専攻部の研究指導をなす外、三浦、堀両教授と学科編成の調査に忙しかった。
大正四年(三十七才)
二月　大阪の関一より佐野校長を通し、大阪高商校長に就任を希望せられたが断つた。
九月　新学期より更に財政学を講ずることになつた。
十一月一日　長女タツ子生る。
十一月　商業組合中央会議所特別委員に嘱託せらる。
十二月　「戦時経済講話」を出版。
大正五年(三十八才)
八月九日　長女タツ子死亡。
大正六年(三十九才)
四月三十日　雑司ヶ谷へ転居、但し上り屋敷一、一二二番地に新築中の家未完成に付その隣家を借りて移る。
七月二十五日　頼貞侯と共に支那漫遊のため東京発、京城を経て安東より北支に入り、奉天、大連、旅順、天津、北京、八達嶺等を視察、八月二十五日下関に上陸。
大正七年(四十才)
一月　国民経済雑誌の編輯主任の一人となる。
四月十七日　四男勇五生る。
八月三十一日　京都大学病院に島薗博士を訪ひ診察を受けし結果、胃癌等重大なる疾患なきも今後禁酒し肉食を節し摂養するやうすすめられ、爾後饗応、宴会等すべて断つた。

十二月十三日　丸ノ内中央亭分店にて商学会第一回を開く。内藤章と共に発起したもので最初の幹事に就任した。

大正八年(四十一才)

一月　昨年末高等教育機関大拡張のため一千万円の恩賜金があり、高商昇格問題漸く白熱化しこれより昇格まで佐野、三浦、堀の三教授と共に大いに奔走した。

四月　桐生高等染織学校講師を嘱託せらる。

四月二十二日　法学博士の学位を受く。

六月　高等試験臨時委員を初めて仰付けられ、爾来昭和十五年に及ぶ。

十月十日　米国華府に開催の第一回国際労働会議に帝国政府代表鎌田栄吉の顧問として米国に出張、横浜より伏見丸に乗つた。

大正九年(四十二才)

一月二十六日　米国より帰朝、横浜着。帰来英国産業史の研究に没頭。

四月一日　多年の宿望たる昇格成り、従つて東京商科大学教授に任ぜられ、専攻部及大学で商工経営、商業政策、専門部一年で経済通論、それに専攻部で研究指導、大学一年のプロゼミナールと多忙であつた。

五月　協調会の社会政策学院で近世産業史を講ず。

大正十年(四十三才)

七月　朝鮮中央経済会の招聘にて京城にて講演、南朝鮮を視察。

十二月　論文集「社会改造と企業」を下出書店より出版。

大正十二年(四十五才)

一月　「英国産業革命史論」を同文館より出版。

二月　台湾総督府視学官講習会のため出張、二月二十日東京駅発、二十五日基隆着、全島視察して三月十三日東京駅着。

七月、八月　猪谷助手を同行北海道へ講演旅行を行う。

九月一日　関東大震災、二日朝一つ橋へ行き学校の自転車にて帰宅、居宅は無事なりし為、その後大学の震災善後策に大いに奔走。

大正十三年(四十六才)

五月　商大学生の手でSPS労働学校が開かれ、講義を依頼され出講した。

大正十四年(四十七才)

七月　如水会常務理事に推さる。沓掛千ヶ滝に茅葺の別荘の建築成り毎年夏をここに過すこととした。

七月　日本経営学会の創立総会、十一月第一回大会を開く、事実上の理事長であつた。

大正十五年(四十八才)

四月　雑誌「企業と社会」を創刊、その「宣言」に曰く「学者は実際を知らず、実際家は学問を知らず、政治は産業を離れ、産業は社会に背く、是実に産業革命の波濤に漂へる現代日本の悩みではないか。吾人は此混沌裡に在つて企業より社会を望み、社会より企業を覗ひ、眼前の細事に捕はれず又空想の影を逐はず、大所高所より滔々たる時勢の潮流を凝視して、世界における新日本建設の原理を探らんとする。吾人の悪む所は虚偽と雷同とであり、吾人の戒むる所は煩瑣と冗長とである。吾人が訴ふる所の読者は純真にして聰明なる満天下の青年識者である」而して其の後毎号巻頭論文を書いたが、創刊号には「新自由主義の必要」を寄せ、本誌で新自由主義の提唱を行つた。

九月　「社会改造と企業」を増補改訂出版。

昭和二年(四十九才)

四月五日　ジュネーヴに於て開催の国際経済会議委員を仰付られ、会議出席のため東京出発。帝国委員は外に志立鉄次郎(首席)、斯波忠三郎、佐藤寛次、佐藤尚武であつた。八月十四日帰朝。

六月　出張中に「企業と社会」の巻頭論文を集めた「新自由主義」が出版された。

昭和三年(五十才)

一月十四日　東京自由通商協会の発会式。これは志立鉄次郎と共に前年会議の決議を日本に生かすために企てたもので発起者は安川、石井徹、藤山、各務、池田、串田、矢野、児玉、宮島、井坂等実業家が多かつた。次いで三月十四日大阪、神戸、名古屋、京都等の協会を糾合して自由通商協会日本聯盟が生れた。

三月　関大阪市長より新設の大阪商大学長にと再三懇望されたが、学究として精進するため辞退することにした。

三月　「企業と社会」終刊。近く再び外遊するのと、編輯担当者たる猪谷助教授が留学のためである。

八月三十一日、海外出張の順番当り欧洲各国印度南洋へ出張を命ぜられ、夫人同伴東京を出発。ロシヤ、ドイツ、バルカン諸国、印度、ジャバ等を漫遊し、昭和四年三月十一日帰朝。

昭和五年(五十二才)

一月頃より山中、竹中の両補手、美濃口、森等の卒業生としばしば研究会を開き、背広ゼミナールと称してゐたが、後に日本経済研究会と命名して毎週火曜に報告会を開くに至つた。

五月　「商業政策」を著す。

九月　商大国立へ移転。新駅を「くにたち」と呼んだら如何と提議し、それが採択された。
十一月　「商工経営」出づ。二十余年間の研究成果で絶讃を博した。

昭和六年（五十三才）

一月　太平洋問題調査会に関係することとなる。
四月　上田、根岸、内池三教授代表編輯の下に商大関係者の雑誌「大学と社会」を創刊、但し不幸にして第五号にて廃刊。
十月　予科、専門部廃止案出で学生一つ橋に籠城す、ために献身的努力をつゞけ、幸に廃止案を撤回せしむるを得た。
十二月十三日　府下中野町桃園九番地に移る。新居は門下生の恩師在職二十五年記念の献呈に成るもの。

昭和七年（五十四才）

三月十四日　叙勲二等授瑞宝章。
三月二十三日　帝大青山外科で痔を手術、痔を治して若返るための景気づけに、四月二十九日天長節に何十年か蓄へてゐたヒゲを剃る。
七月　計理士試験臨時委員を命ぜらる。爾来昭和十一年に及ぶ。

昭和八年（五十五才）

二月　「最新商業政策」を著す。「商業政策」の続編。
三月　日本学術振興会が成立し、経済学部の委員に指名され、又日本人口問題の研究に付援助を受けることとなつた。
五月号の社会政策時報に「近き将来における日本人口の予測」を発表。我国人口問題の研究における画期的な論文と評された。
五月二十日より銀座西七丁目貿易会館内に一室を借り日本経済研究会の本拠とする。毎週火曜に例会を開くのはもう長い習慣になつてゐた。
七月　日本経済研究会における諸研究を編し「日本人口問題研究」として協調会より出版。其後、九年第二輯、十二年に第三輯を出す。何れも高く評価された。
八月二日　日枝丸にて横浜出帆、加奈陀バンフに開催の太平洋会議に日本側代表として出席、この会議では人口問題に関し日本のため大いに弁じ、著しく海外の注目を惹いた。九月二十一日横浜帰着。
十月　帝大の講師を委嘱され、商業政策を講ず。
十一月二十七日　財団法人、人口問題研究会の理事に推され第一回の理事会に出席。

昭和九年（五十六才）

二月六日　鎌田栄吉逝く。和歌山県の先輩で最も尊敬してゐた人であつた。
四月十四日　結婚二十五年祝賀のため門下生より帝国ホテルに招かる。
八月二十三日　簡易保険積立金運用委員会委員を仰付らる。
八月二十四日　石油業統制委員会委員被仰付。

昭和十年（五十七才）

七月　不通過論文をめぐり粛学事件起る。十月佐野学長退き、三浦新七学長となり一応落着す。

昭和十一年（五十八才）

二月十日　東京商科大学予科主事事務取扱を命ぜらる。
七月二十九日　米国ヨセミテにて開催の太平洋会議に日本側代表として出席の為め大洋丸にて横浜発、今回は中小工業問題と生活程度に就て論じた。九月二十四日帰朝。
十二月二十三日　三浦学長の後を承け東京商科大学長に任ぜらる。

昭和十二年（五十九才）

一月三十日　勅旨を以て帝国学士院会員被仰付。
同日、教員検定委員会常任委員被仰付。
六月　人口問題研究をまとめて「日本人口政策」として公刊。
九月三十日　時局特別講義を各教授共同で為すこととし、第一回として「戦時経済概論」を講ず。これらの講義は後に「戦時経済講話」として出版。
十二月十日　教育審議会委員被仰付。
十一月　日本学術振興会第二十三小委員会（中小工業の研究）の委員長に推さる。
十一月　太平洋会議に提出のデータペーパーを輯して Small Industries of Japan と題しロンドン牛津大学出版部より刊行。
十二月　「経営経済学総論」を著した。商工経営を全く新しく書き改めたもの。

昭和十三年（六十才）

一月「一橋論叢」を発刊。
五月　銀座の「日本経済研究会」を解散。
十二月　この夏生れた東亜文化協議会の第二回会議が東京帝大で開かれ、これに初めて出席。

昭和十四年（六十一才）

各務鎌吉先輩の援助を得て満支視察のため小田橋助教授を伴ひ東京を出発、大連、鞍山、奉天、新京、天津、北京、青島、上海、漢口、南京を視察し、上海より榛名丸にて五月十四日神戸入港。
五月二十三日　各務鎌吉死去。遺産の中より各務奨学

基金を商大に寄付され、後に東亜経済研究所を設立することになつた。
八月二十五日　北京にて開会の東亜文化協議会に出席のため、熱河丸にて神戸を出帆したが暴風のため塘沽に上陸出来ず、大連に引返し滞在、九月六日吉林丸で帰国。

昭和十五年（六十二才）

二月五日　人口問題研究所参与被仰付。同研究所設立はかねてよりの主張で、前年その予算が成立した時「歓迎すべき報道」と朝日新聞に書いた程であった。
四月一日　商大内に東亜経済研究所開設。
四月二十五日　盲腸炎並腹膜炎のため慶応病院に入院、同日木村教授の手術を受く。
五月八日　午前七時二十分薨去。
五月九日　叙正三位。
五月十三日　授旭日重光章。
五月十三日　神田一橋講堂にて神式により東京商科大学葬を行ふ。
六月二十三日　多磨墓地第十九区第十側第三号に埋骨。

〔この年譜は一橋新聞第三一〇号、第三一一号、第三一二号、第三一三号（昭和十五年六月二十五日、七月十日、七月二十五日、九月十日号）に金子鷹之助、小田橋貞寿共編「上田先生年譜」として連載されたものに、極微の改訂を加へたものである〕

跋

父が昭和十五年に亡くなつてから、二十年余りの歳月が過ぎた。そして、いま父の日記が出版されることになつた。この日記をどうするかについて私自身、生活の繁閑の折にふれて気にかかつてきたものだけに聊かの感懐なきを得ない。父の没後、私が蔵書の整理をしていたとき、この日記を発見した。父の生前、時折の話でこの日記のことは聞き知つていたが、どんな内容であるかについては特に気にもとめなかつた。

その当時、王子製紙(株)に勤務して漸く三十才となつた私はこの日記に接して改めて父を見直すこととなり、また自己を反省する機会ともなつた。家庭における父は些事にふれず、子供らに対しても殆んど放任主義で一貫した平凡人に過ぎなかつた。他方、社会人、学者、教授として有名人だつた父についてはそれぞれの分野において毀誉褒貶があり、すべてではないにしてもその多くの評価が子である私らの耳にも入り、多かれ少かれ私たちの日常の生活に影響していたであろう。しかしながら、父の人間性、特にその精神的支柱たる自由主義が如何にして形成され、その生涯の活動を意義づけたかについては、恐らくは父の少数の知友を除いて知る処がなかつたのではないかと思う。私も時折の話の間から父の生立ちや、性格の形成について想像することはあつても、余りにも身近かなだけに却つて之れを追究することはしなかつた。父の日記、特にその青年時代を読むに及んで私は私なりにその解答を得たと思つた。その時以来、私はこの日記そのものの出版は別として父が書きはじめて少年時代だけで終つた自伝（本巻収録）を補完する意味でこの日記を材料とした伝記を作りたいと念願していた。だが、この念願の実現は私自身および四囲の事情によつて果されないまま、十年が去り、二十年が過ぎたのである。

そして父の二十年祭にあたつて門下生（現存者約三百名）によつて肖像画の製作のため記念募金が行われ、

残余があれば日記の刊行も併せ行うことが企画された。前者は宮本三郎画伯の手によつて昭和三十六年に完成され、すでに一橋大学学長室に掲げられている。

日記についてはこれが私の手元にあることを知つていた少数の門下生によつて刊行の計画が企てられ、昭和三十六年の父の命日の際に集まられた門下の方々（約八十名）に発表され、大方の賛同をえてこれが刊行の決定となつたのである。そして門下生のうち、猪谷善一、中川孫一、山中篤太郎、小田橋貞寿の諸氏ならびに私を加えた五人が編集委員となつて計画を実行することとなつた。

日記は父が十六才から六十一才で没するまで四十六年にわたつており、この間所謂日常の記録としての日記を主体として、感想、論稿等それぞれの時代によつて長短、精粗のちがいはあるが、終始一貫簡潔な文体によつて書き続けられている。この日記は初期の三ヵ年はたて書きの帳面六冊に書かれているが、その後は堅表紙のノート十六冊に片仮名横書きされたものが本文（両者計二十二冊）で、他に夜雨荘日記（本巻収録）、旅行記、感想等が六冊ある。その分量は原稿用紙（四百字詰）で二千七百枚、他に英文がタイプ紙で五百五十枚程度になる。

父は生前、最も忙しかつた時期には日記を書いていないと云つていたが、明治四十二年海外留学から帰朝後約三ヵ年間がこれにあたり、それぞれの年の主要記録をあとからまとめて書いているにとどまつている。だから毎日書いたかどうかは別として日記らしく克明に書いたのはこれ以前、すなわち明治二十七年から四十二年初めまでで、薄いものや分厚いものをとりまぜて二十二冊の日記帳のうち、十五冊が費されている。これ以後――大体大正時代以降――はポケット日記のメモをもとにして一週間ないし十日目ごと、場合によつては一ヵ月以上たつて日記として書き綴つたことが、その文中からも推察できる。

日記の編集にあたつて、私は自宅でまず日記の筆写作業を数人のアルバイト学生に依頼することから始めた。この作業は学生の休暇期にあたる昭和三十五年夏からはじめていた。出版上の便宜から、片仮名横書きを平仮名たて書きに改めたほかは旧仮名遣いで出来るだけ原文のまま筆写した。作業の進行にしたがつて、

日記のどの部分から出版するか、英文をどう織込むか、感想、論稿として独立のエッセイをなしている部分をどう扱うかなど、編集上困難な問題があることが解つた。

そこで、日記としての内容、形式とも最もまとまつており、編集上も問題の少い大正八年から昭和十五年に至る父の後半生二十二ヵ年分（原稿で約八百枚）をまず刊行することが、費用とも関連して適当であるとの結論に達した。この原稿は昭和三十六年はじめにできたが、編集委員諸氏の了承をとり、諸氏に校閲の労を煩わしてようやく出版の運びとなつたものである。本巻には別に夜雨荘日記（大正十四年―昭和十四年）、自伝および年譜を収録した。本巻の前編は追つて刊行される予定である。

本書はもともと門下生有志の援助によつて成つたものであるから、限定出版とすべき性質のものであるが、出版を引受けられた慶応通信（株）の希望もあつて、一部市販されることとなつた。終りに臨んで、編集委員をはじめ、本書刊行にあたつていろいろな形で援助協力された方々に厚く感謝の意を表する次第である。

昭和三十八年二月

上田　正一

上田貞次郎日記　　定価壱千円

昭和三十八年四月十五日　印刷
昭和三十八年四月二十五日　発行

©著　者　上田貞次郎

発行者　西宮市甲子園四番町三二
上田貞次郎日記刊行会

印刷者　安倍七郎

印刷所　東京都港区芝三田豊岡町八
図書印刷株式会社

発売所　慶応通信株式会社
東京都港区芝三田綱町一
振替　東京一五五四九七